

砥ぐ

中井ひさ子

川沿いのアパートの窓は
冬でも簾をかけたままだ
日暮れがまっすぐ
入り込んでくると
俺は流し台の前に立ち
いつものように
包丁と砥石をとりだした

職を転々とした俺の腕に
残ったのは
包丁を砥ぐことだった

左手で押さえる包丁のはらに
女の姿が浮かぶ
何があつたわけじゃない
忘れた物を
思い出したように出ていった

砥ぐ手に
隙間からの川風が
やたら冷たい
夕まぐれに
橋一つを違えて渡って行ってしまつたか
橋を渡つたらもう帰ってこないだらうか

鋭くなる刃先が少しづつ
鈍い怒りに変わっていく

包丁を研ぐたび女を思い出すのか
女を思い出すたび包丁を研ぐのか
今はもうわからない